

プラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのプラマーナの定義の解釈 ——プラジュニャーカラグプタの真理論——

小 野 基

ダルマキールティの主著『プラマーナ・ヴァールティカ』(PV)第2章のプラマーナ(正しい認識)の定義を論じる冒頭部分(vv. 1-7)に対するプラジュニャーカラグプタ(ca. 750-810)¹⁾の註釈『プラマーナ・ヴァールティカ・アランカーラ』の論述は、単なる註釈に留まらず、プラジュニャーカラによる独自の発展的議論を含んでいるという点で、この大部な論書の中でもとりわけ重要な部分の一つと行うことができる。プラジュニャーカラはそこで、主としてミーマーンサー学派を論敵として同学派の諸学説の批判に携わりながら、同時にダルマキールティの提示したプラマーナの定義に独自の解釈を加えており、随所で緻密な議論を展開しているが、中でも注目に値するのは、彼がダルマキールティのプラマーナの定義に立脚して構築した真理論(*prāmāṇyavāda*)であると思われる²⁾。

そこで本稿では問題をプラジュニャーカラの真理論に絞り、若干の考察を加える。彼の真理論はそれ自体極めて重要な意義を持つと思われるにも関わらず、従来必ずしも正当に理解されているとは言いがたい。しかし他方で、シャーキャブッディ、ダルモッタラらプラジュニャーカラに先立つ³⁾ダルマキールティ註釈者たちの真理論が、近年諸学者の研究⁴⁾によって明らかにされてきている。そこで本稿では、それら先行する註釈者たちの見解を視野にいれつつプラジュニャーカラの真理論が登場した経緯を探ると共に、その独自性を明らかにしたい。

1. プラジュニャーカラグプタの真理論の登場の思想史的背景

まず初めに、ダルマキールティからプラジュニャーカラに至る真理論の変遷を、プラジュニャーカラの議論に関連する範囲で一瞥しておく。

周知のように、ダルマキールティはPV第2章冒頭で、いわゆるプラマーナの定義を提示している。すなわち、「プラマーナとは整合的な認識である」(PV II 1ab'), および「あるいはまた、未知の实在を明らかにするものである」(PV II 5c)

ブラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのプラマーナの定義（小野）（199）

がそれである⁵⁾。このうち、第1の定義に関してはさらに、「整合的であることは、目的の実現において実証される」(PV II 1 'bc') という説明が加えられる。これによって、ダルマキールティが、ある認識の真理性 (*prāmāṇya*) はその認識のもたらす目的実現において確立する、と考えていることが首肯される。また「真理性は行動によって」(PV II 5a) というダルマキールティの言明も、同様な文脈で理解され得る。ダルマキールティはここでは多くを語ってはいないが、これらのPVの言明から理解される限りでは、彼はインド哲学一般で言う真他律論 (*parataḥprāmāṇyavāda*) の立場を取っているとみなし得る⁶⁾。

ところで真他律論は、真自律論 (*svataḥprāmāṇyavāda*) によってヴェーダの真理性の擁護を計るミーマーンサー学派の容認できるところではない。事実クマーリラは、真他律論を厳しく批判した。彼の主要な論点は、真他律論が真の確定のために他の認識を必要とする限りその本性上無限遡及 (*anavasthā*) に陥らざるを得ないとするものであるが⁷⁾、この批判はPVに現れている限りでのダルマキールティの理論に対しては、有効なものであると言える。という訳で、クマーリラの批判をかわすためにダルマキールティのプラマーナの定義の議論に一定の限定ないしは解釈を加えることが、彼の後継者たちの課題となったのである。

デーヴェンドラブッディとシャーキャブッディの真理論はこのような要請に対する1つの回答であったとすることができる。デーヴェンドラブッディは、ダルマキールティの学説を単純な真他律論とは解釈せず、通常的直接知覚の真は他律的であるとしながら、他方で推論の真は自律的であると考え⁸⁾。一方シャーキャブッディでは、ある対象に関する繰り返し経験した直接知覚と最初の直接知覚を区別して、ダルモッタラの真理論⁹⁾に先鞭をつけている点が注目に値するが、特に重要な点は、彼が目的実現の認識自体は自律的に真であると明言していることである。すなわち、シャーキャブッディによれば、ある対象を初めて認識する最初の直接知覚のみが唯一他律的に真が決定される種類の認識であるが、その真を確定する根拠となる後時の目的実現の認識が自律的に真であることによってクマーリラによって指摘された無限遡及は回避される¹⁰⁾。

このようにしてシャーキャブッディらは、真他律論が無限遡及に陥るとするクマーリラの批判をかわすことにはひとまず成功した。しかし、最も根本的な最初の直接知覚の真理性に関しては、彼らの解釈に問題がないわけではない。すなわち彼らによれば、ダルマキールティの「真理性は行動によって」(PV II 5a) という言葉の意味は、「(直接知覚一般) 真理性は (それ自体は自律的に真である)

(200) プラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのプラマーナの定義 (小野)

後時の目的実現の認識によって(確定される)」ということになるが¹¹⁾、この規定はこのままでは循環論法 (*itaretarāśraya*) に陥ってしまうのである。なぜならば、ある直接知覚の真理性が後時の目的実現の認識によって確定されるという場合、他方でその目的実現の認識に到達するためには、何らかの真である直接知覚に基づいて行動することが前提となるからである¹²⁾。

以上の循環論法を避けるためには、真理性の本質を従来とは全く異なった観点から捉え直す必要があった。アルチャタの思想¹³⁾にその萌芽をみることができるこの傾向を明確に体系づけたのが、ダルモッタラに他ならない。彼によれば、ある認識はたとえその目的実現が暫定的には曖昧であるにせよ、人間の対象への行動を動機づける (*pravartaka*) 手段であるという限りで、プラマーナである¹⁴⁾。その際、その認識が実際に目的を実現するかどうかは差し当り問題ではない。従って彼にとって認識の真理性とは、あくまで目的実現の獲得可能性 (*prāpanāśakti*) に過ぎない¹⁵⁾。このように考える時には、循環論法に陥ることはない。

このダルモッタラの理論はダルマキールティの真他律論に対する画期的な解釈であったと言えるが、真理性の確定の問題に関してはなお難点を残した。すなわちプラジュニャーカラは、

「ある認識が目的の実現と結びつくかどうかは(その認識が生じた時点では) 曖昧であるにすぎず、その曖昧さは後時の目的実現が現象することによって初めて排除される」¹⁶⁾とダルモッタラの理論を要約している¹⁷⁾。ここでプラジュニャーカラは、ダルモッタラの理論の中に、通常の(最初の)直接知覚の真理性はその生起の時点では確定することができない、という真他律論に宿命的にも見える問題点を見だし、批判しているのである。

2. プラジュニャーカラグプタの真理論

プラジュニャーカラの真理論の登場には、大略以上のような思想史的背景がある。すなわち、直接知覚がその生起の時点で確実に真であることをどうしたら主張できるのか、という問題に、真自律論ではなく、あくまで目的実現が真を確定するというダルマキールティのプラマーナの定義の枠組みの中で回答することが、プラジュニャーカラの課題となったのである。

では一体彼はどのようにしてこの難問に取り組んだのだろうか。彼はダルマキールティのPV第2章5 aに対する全く新しい解釈として、この問題に回答する独自の真理論を提示するのだが、まず次のような偈によって自説を要約する。

ブラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのプラマーナの定義(小野)(201)

「ある認識は、同一性 (*tādātmya*) と因果性 (*tadutpatti*) によって確定された、目的を実現する本性を認識せしめるという限りにおいて、プラマーナである」¹⁸⁾

彼はここで、目的の実現が認識の真を確定する根拠であるというダルマキールティの議論から出発する。そしてダルマキールティの論理学の術語を援用しながら、もしもある認識が目的の実現と同一性・因果性の関係によって結びつけられているとするならば、その場合にはその認識の真は、それが生じた時点で既に必然的に知り得る、と主張するのである。ここで彼が問題にしている認識とは通常の直接知覚である。また彼は、シャーキャブッディらと同様に、目的実現の認識自体の真理性は自律的であると考えてるので、無限遡及は起こらない¹⁹⁾。

それでは次に、ある認識が目的の実現と同一性・因果性の関係によって結びつけられているとは、一体どういう意味であろうか。ブラジュニャーカラはこれを次のように説明する。まず同一性であるが、ある認識とその目的実現という過程の中で、本質 (*svabhāva*) という点に着目するならば、対象の側に継続性が前提される限り、対象は刹那滅であるにもかかわらず、初めの認識が対象とする本質と目的を実現する本質との間には同一性の関係が成立する。このことが、次に来る議論の存在論的な前提となる²⁰⁾。

次に因果性であるが、ここでブラジュニャーカラは、彼の真理論にとって決定的な意味を持つと思われる非常に興味深い議論を展開する。すなわち彼によれば、プラマーナとはそもそも、「必然的に結果(目的の実現)を生ぜしめる」(*avaśyambhāvīkārya*) 原因に他ならない。この場合に、存在論的(オントロジカル)な意味での結果としての目的実現は、論理的(ロジカル)には、プラマーナの原因であることになる²¹⁾。なぜならば、ダルマキールティの論理学では、原則的には結果から原因への推論のみが許されるからである。

こうして、未来にある目的の実現がプラマーナにとっての論理的「原因」とみなされるこの理論では、「未来原因(=未来にある原因)」という一見奇妙な概念が正当化されることになるが、ブラジュニャーカラは、過去の事柄が既に刹那滅の法則によって滅しているにもかかわらず「原因」であり得るならば、「未来原因」という概念が成立したとしてもおかしくはないとして、反論を退けている²²⁾。

以上の議論によってブラジュニャーカラが述べようとしていることを要約するならば、ある種の認識が必然的に未来に結果、すなわち目的の実現をもたらすことがあり、そのような認識こそがプラマーナである、ということになる。この場合、その認識の真理性はあくまで、その生起の時点で確定されているのであり、

(202) プラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのブラマーナの定義 (小野)

ダルモッタラの考えるように暫定的に曖昧であるのではない。これはある意味で画期的な発想の転換であると思われるのだが、その意義を明らかにするためには、このような真理論の理論的基盤となっている「未来原因」というメタ・セオリーについて今少し考察を進めておく必要がある。

3. メタ・セオリーとしての「未来原因説」とその起源

筆者がこの「未来原因」をメタ・セオリーと呼ぶのは、プラジュニャーカラ自身が、この理論を真理論ばかりでなく、他の論題にも適用しているからである。それは、目下問題になっている真理論の文脈でも示唆されているように²³⁾、輪廻の論証 (*paralokānumāna*) の問題に他ならない。ラトナキールティやモークシャーカラグプタら後代の仏教論理学者たちは、周知のように輪廻を論証するための2つの論証式を立てている。その中で、来世の存在を論証する同一性の論証因を用いた推論式は²⁴⁾、基本的に上述の「未来原因」説をメタ・セオリーとしているとあって差し支えない。というよりむしろ、実はこの推論式の原型は既にプラジュニャーカラの論述の中に存し、ラトナキールティないしはジュニャーナシュリーミトラがその論述を推論式に構成したというのが真相であろう。

プラジュニャーカラの輪廻の論証における「未来原因」説の論述²⁵⁾はかなりの分量にのぼり、全容は今のところ不明であるが、その核心となる一節は彼の真理論の内包する意義を理解するためにも不可欠であるので、ここに引用する。

「原因が不完全である場合には、結果は存在しない。しかし、もしも諸要素をもつ原因が十全である場合には、結果が生じないというのは矛盾である」²⁶⁾

この論述から明らかなように、「未来原因」すなわち結果から原因を推論する理論を適用する場合の前提条件は、原因としての諸要素が十全であることに他ならない。輪廻の論証の場合には、煩惱という原因が十全であることによって、来世という結果が必然的に帰結される。

なおここで注目すべきことは、後世のジャイナ教徒が、このプラジュニャーカラの輪廻の論証を「未来原因説」(*bhāvīkāraṇavāda*) と呼び、これをプラジュニャーカラによる独創的理論の一つに数え上げているという事実である²⁷⁾が、この理論は果たしてプラジュニャーカラの独創に帰することができるものなのであろうか。この点については、註釈者ヤマーリが極めて興味深い見解を述べている。

ヤマーリは、真理論と輪廻論証の2つの箇所に対する註釈の中でプラジュニャーカラの「未来原因説」の正統性を問題にしており、この理論がダルマキールテ

ブラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのプラマーナの定義（小野）(203)

の論証因の理論と基本的には矛盾することを指摘して、原因は過去のもでなければならないことを説くPVの幾つかの記述を引合いに出している。しかし同時に彼は、この理論が全くのブラジュニャーカラの独創であるとする見解には疑問を表明し、この理論の先駆的形態としてダルマキールティのPV第1章の第7偈を引用するのである²⁸⁾。この偈でダルマキールティが表明している、十全な原因から結果生起可能性 (*kāryotpādayogyatā*) が推理され得るとする理論は、近年諸学者に注目されているが²⁹⁾、これこそは正にブラジュニャーカラの「未来原因説」の起源とみなし得るものであろう。但し、シュタインケルナーも指摘しているように³⁰⁾、ダルマキールティ自身はこの理論を十分に展開させることはなかったように見える。これを自らの体系のメタ・セオリーとして刷新し、個別的論題に適用したのは、やはりブラジュニャーカラの功績であったといえよう。

4. 結論として

以上で「未来原因」というメタ・セオリーの意味とその由来が凡そ明らかになったと思われるので、最後に今一度本来の問題に立ち返り、「未来原因説」によって基礎づけられたブラジュニャーカラの真理論の意義を考えてみたい。

ブラジュニャーカラは先行するダルマキールティ訳註者たちとは異なり、ある認識は、原因であるその認識が結果である目的実現を必然的にもたらすという限りで、その生起の時点で直ちに真であり得ると考える。しかしながら、無論全ての認識が必然的に結果をもたらす原因であると言うのではない。そうではなく、ある認識がもしも一定の条件を十全に満たしていると仮定するならば、その認識は目的実現を必然的にもたらす、すなわちプラマーナであるというのが、「未来原因説」に基づくブラジュニャーカラの真理論の趣意である。

このことは実は、認識が一定の条件の下では未来の目的実現を確実に予測できる、ということの理論的可能性を表明しているのに他ならない。例えば、水は通常の気圧の下で摂氏0度以下になると結氷するが、現代の我々はこれを実験室内の内部で一定の条件下で行えば、水の結氷を確実に予測できる。この例からも明らかかなように、ブラジュニャーカラの真理論が結果的に到達しているのは、一種の科学的思考法とも呼び得るものである。実際には、彼の真理論は思想史の中でそれ以上深化されることはなかったが、そこには潜在的にはあれ、思考のパラダイム・チェンジの可能性が存していたとだけは言い得るのではなからうか。

原典略号表

TBh=Tarkabhāṣā: Tarkabhāṣā and Vādasthāna of Mokṣākaragupta and Jitāripāda. Ed. H.R.R. Iyengar. Mysore 1952; **TS**=Tattvasaṃgraha: Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita. With the Commentary of Kamalaśīla. Ed. E. Krishnamacharya. Baroda 1926; **PPar II**=[Laghu-]Prāmāṇyaparīkṣā: Krasser, H. Dharmottaras kurze Untersuchung der Gültigkeit einer Erkenntnis—Laghuprāmāṇyaparīkṣā. Teil I. Wien 1991; **PV I, II**=Pramāṇavārttika, chapter I, II: Pramāṇavārttika-Karikā (Sanskrit and Tibetan). Ed. Y. Miyasaka. Acta Indologica 2 (1971/72). なお本稿での I, II 章は宮坂本における III, I 章に相当。 **PVA**=Pramāṇavārttikālaṃkāra: Pramāṇavārttikābhāṣyam (Vārttikālaṅkāraḥ). Ed. R. Sāṃkṛtyāna. Patna 1953; **PVṬ**=Pramāṇavārttikaṭīkā: Peking 5718, Je 1b1-402a8; Ñe 1b1-348a8; **PVP**=Pramāṇavārttikapañjikā: Peking 5717, Che 1b1-390a8; **Y**=Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā Suparīśuddhi: Peking 5723, Phe 208a7-345a8; Be 1b1-290a7; Me 1b1-436a8; Tse 1b1-321a5; **RNA**=Ratnakīrtinibandhāvāliḥ: Buddhist Nyāya Works of Ratnakīrti. Ed. A. Thakur. Patna 1975; **ŚV**=Ślokaivārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa. With the Commentary Nyāyaratnākara of Śrī Pārthasārathi Mīśra. Ed. D. Śāstri. Varanasi 1978; **SVṬ**=Siddhiviniścayaṭīkā. Ed. Mahendra Kumar Jain [2 vol.], Benares, 1959; **HBT**=Hetubinduṭīkā: Hetubinduṭīkā of Bhaṭṭa Arcaṭa with the Sub-Commentary entitled Ālokā of Durveka Mīśra. Ed. S. Sanghavi, Muni Śrī Jinavijayaji. Baroda 1949.

- 1) プラジュニャーカラの生存年代に関しては、ダルモッタラとの関係から一応このように仮定しておく。詳細は近く別稿で論じる予定。
- 2) Cf. PVA 23, 15-29, 15. なお、この部分に関しては渡辺重朗氏による和訳(『量評釈莊嚴』における量の定義, 『成田山仏教研究所紀要』, 第1巻, 1976: 367-400)がある。また谷貞志氏は次の論文の中でしばしばプラジュニャーカラの真理論に言及している(『逆行する認識論と論理——ダルマキールティにおける PRAMĀṆA (認識論および論理的真理決定基準) の構造』, 『平川彰博士古稀記念論集—仏教思想の諸問題』, 東京, 1985: 531-550)。
- 3) ダルモッタラがプラジュニャーカラに先行する点については、本稿の論述がその論証の一端となると考えるが、包括的な検討は別の機会に行う予定。
- 4) Cf. Ernst Steinkellner: Early Tibetan Ideas on the Ascertainment of Validity (*nges byed kyi tshad ma*). In: Tibetan Studies, Vol. I. Ed. Sh. IHARA, Z. YAMAGUCHI. Naritasan Shinshoji, 1991: 257-273; Helmut Krasser: Dharmottaras kurze Untersuchung der Gültigkeit einer Erkenntnis—Laghuprāmāṇyaparīkṣā. Teil II. Wien 1991; 稲見正浩: 『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究(1), 『広大文学部紀要』, 第51巻, 1992: 59-76; 同(2), 同紀要, 第52巻, 1992: 21-42; 同「仏教論理学派の真理論—デーヴェーンドラブッディとシャーキャブッディ」, 『渡辺文麿博士追悼記念論集』, 下, 1993: 85-118。
- 5) この二つの定義の関係については註釈者間で様々な解釈が存在し、プラジュニャーカラ自身も独自の解釈を示しているが、これについては別稿で論じる予定。

- 6) Cf. Shoryu Katsura: Dharmakīrti's Theory of Truth. *Journal of Indian Philosophy*, vol. 12, 1984: 223.
- 7) Cf. TS 2853-4 = Bṛhaṭṭikā; ŚV, codanā, v. 76; PVA 4, 9-11.
- 8) Cf. PVP 2b5-3a2.
- 9) Cf. Steinkellner op. cit.
- 10) Cf. PVT(Ñe) 91a6-b2. なおシャーキャブッディの議論の詳細については、註4に掲げた稲見氏の第3の論文を参照。
- 11) Cf. PVP 6a1f.
- 12) Cf. PPar II (51), 5-8; Krasser op. cit.
- 13) Cf. HBT 1, 18-2, 9; PVA 26, 18-24 (cf. Y (Phe) 332a1f.).
- 14) Cf. PPar II (51), 9-13; Krasser op. cit.
- 15) Cf. PPar II (42), 18-(43), 8; Krasser op. cit.
- 16) Cf. PVA 29, 7: sa cārthakriyāsaṃbandhaḥ saṃdigdhaḥ. arthakriyānirbhāsāt tatra saṃdeho vyāvartata eva.
- 17) ヤマーリはこのブラジュニャーカラの論述がダルモッタラ批判であることを示唆する (cf. Y (Phe) 338a5f.).
- 18) Cf. PVA 27, 13: arthakriyāsvārūpasya niścitasyāvabodhanāt/ jñānaṃ pramānaṃ tādātmyatadutpattiprabhāvataḥ//
- 19) Cf. PVA 4, 9-16.
- 20) Cf. PVA 27, 15-17.
- 21) Cf. PVA 27, 18-28, 2.
- 22) Cf. PVA 28, 3-30.
- 23) Cf. PVA 28, 24.
- 24) Cf. RNA 3, 9-11; TBh 63, 1-5.
- 25) Cf. PVA 69, 25: tasmād anāgatasyāpi kāraṇatvam.
- 26) Cf. PVA 56, 22f.: kāraṇavaikalye hi kāryasyābhāvaḥ, sakale tu kalāvati kāraṇe kāryam anutpattimad iti vyāhatam.
- 27) Cf. SVT: Introduction p. 43. なお、この問題の詳しい検討は別の機会に行う。
- 28) Cf. Y (Phe) 336b4ff.; Y (Be) 82a5ff.
- 29) Cf. 岩田孝『知識論決擇』(Pramāṇaviniścaya) 第三章(他者の為の推論章)和譯研究 ad vv. 64-67 (上)], 『東洋の思想と宗教』, 第6巻, 1989, (1)-(33); Ernst Steinkellner: Dharmakīrti on the Inference of the Effect (*kārya*). In: *Papers in Honour of Prof. Dr. Ji Xianlin on the Occasion of His 80th Birthday* (II). Ed. Li Zheng and Jiang Zhongxin, Nanchang 1991: 711-736.
- 30) Steinkellner, op. cit.

※本稿は平成5年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。

〈キーワード〉 Prajñākaragupta, prāmāṇyavāda, bhāvīkāraṇavāda

(文部技官(筑波大学哲学・思想学系), Dr. phil.)